ETV特集
シリーズ アメリカと被爆者
第2回“赤い背中”が残したもの

放送日：2018年8月11日　放送時間：60分

対象校種　小学校高学年　中学校　高校

対象教科　社会　道徳　総合

この番組の良さ

● 被爆者の人生は、我々に生きる勇気を与えてくれる

谷口稜曄さんの赤い背中の映像は衝撃的で、核兵器の恐ろしさを如実に伝えてくれます。「私は自分のためにじゃなくて人のために生きなきゃいけない」「いくら苦しくても生きなきゃいけない」という言葉に、世界平和のためにという谷口さんの決意と生き方が表れています。その他、右耳を失っても明るくエネルギッシュに生きる吉田勝二さんや、全身に被爆しながらも、会社初の女性管理職になった堂尾美禰子さんの生涯を目の当たりにし、「生きるとは何か」を考えさせてくれる番組です。

● 日本人とアメリカ人の核兵器への考え方の違いが浮き彫りになる

2発の原爆が投下され、大きな被害を被った日本人と、核兵器を投下したアメリカ人の、核兵器に対する考え方の違いに驚かされます。アメリカでは原爆投下について、「戦争を早く終結させ、これ以上の犠牲者を出さずに済んだ」という肯定的な意見が多数を占めていました。しかし、スーザン・サザードさんの著作により、一般市民に多大な犠牲者が出た事実がアメリカでも明らかとなり、核兵器への見方が少しずつ変化し始めていることを理解することができます。

執筆者
能代市立能代南中学校
教諭　嵯峨静人

番組活用のポイント

● 長崎の3人の被爆者の生き方を考える

原爆について、教科書などでは広島の被害状況を写真と共に掲載していることが多いですが、長崎についての記述は少ないと言えます。本番組は、長崎への修学旅行の事前学習での利用が考えられます（総合）。

番組に登場する被爆者は、長崎で被爆し、奇跡的に生き延びて、それぞれの人生を歩みました。長崎から核廃絶を発信したり、核兵器の恐ろしさを全国で講演したりと、心と体に傷を負いながらも全力で生きる姿に感銘を覚えずにはいられません。私たちは日々悩みや不安を抱えて生きていますが、被爆者の方々は屈強な精神力で逆境を乗り越え生きてきました。映像からは、人間の「生き方」「生きる姿勢」はどうあるべきかを考えることができます。道徳の「希望と勇気、努力と強い意志」の内容項目での活用が考えられます。

● なぜ、原爆投下について異なる考え方があるのか考察する

アメリカの国立空軍博物館では、原爆投下に使われた爆撃機の前でスタッフが、「この爆撃機は200万~250万の人命を救った。侵攻の必要がなくなったからです」と声高らかに話していました。しかし、スーザン・サザードさんの著作を基に議論を重ねている学生たちの半数以上は、博物館の説明に対して疑問の声を上げています。なぜこのような考え方の違いが生まれたのか、その背景にあるものは何なのかを考えさせることができます。中学校社会科、高校の歴史分野で太平洋戦争を扱う際に活用すると効果的でしょう。

また、核兵器の問題は日々ニュースになっています。2019年に中距離核戦力全廃条約が失効してアメリカとロシアが再び核軍拡競争を始めかねない現状や、2017年に採択され、批准国が増えている核兵器禁止条約について考えるきっかけにできる教材です。

対象校種　中学校　高校　　対象教科　社会　道徳

長崎のきのこ雲の下にあったもの

［授業時間 50分×2］　部分視聴

児童生徒の思考と活動の流れ	教師の支援と評価
最初に広島に落とされ、その後長崎に落とされた 一瞬のうちに廃墟となり、たくさんの人が亡くなっている この赤い背中の人は、この後どうなったのだろうか話し合う やけどがひどいので亡くなったかもしれない 生き延びても後遺症で、かなりつらい思いして生きたのでは？ 長崎の被爆者は、どのような人生を送ったのだろうか。また、アメリカ人は原爆投下をどう考えているのか。 残虐な結果を残したので、今後は絶対に使うべきではない 戦争だから、アメリカが勝つには使用は仕方なかった	・原爆について知っていることを聞く。 ・赤い背中の画像を提示し、「この人のその後の人生がどうなったと思うか」と聞く。 ・生存し、86歳まで生きたことを伝える。 ・そのような非人道的な原爆について、「アメリカ人はどう考えているだろうか」と問う。
番組部分視聴7分28秒～26分52秒 谷口さん 吉田さん 堂尾さん 身体に後遺症がありながら、核廃絶運動に努力した 顔に後遺症を負い、周囲の目に苦しんだが、明るくエネルギッシュに生きた 全身を被爆しながら、それを乗り越えて、会社で女性初の管理職となった 3人とも逆境を乗り越えて、前を向いて人生をより良く生きた	・生徒の求めに応じて、3人の日本人被爆者の人生についての部分の番組を視聴する。 ・画像や映像のインパクトが強いものがあることを事前に伝える。
アメリカ人は原爆投下をどう考えているのかを推測し、話し合う 残忍だがアメリカが負けると大きな被害を受ける 日本が仕掛けた戦争だから原爆投下も仕方ない 番組部分視聴49分49秒～54分33秒 映像をふまえて、「原爆投下は正しかった」という意見について議論する 原爆投下は戦争を早く終らせるため有効と思っていたが、被害を見て間違いだと気付いた 約3割は原爆投下は正しかったと考えている。理由は ①戦争を早く終わらせるため ②国の安全を守るため 長崎の被爆者は一生残る被害を受けたが、逆境を強い精神力で乗り越え、充実した人生を送った。また、被爆の経験を決して忘れず、平和な社会のために活動した。スーザン・サザードの著作により、アメリカ人の原爆についての考え方が、肯定から否定へと少しずつ変わりわり始めている。 核兵器の世界的な現状について調べてみたい	・アメリカ人の考えについての部分を視聴する。 【思考・判断・表現】 被爆者の生き方の良さを、現在の自分と照らし合わせながら考察し、発表できたか。また、アメリカ人の核兵器に関する考え方の変遷から、核兵器を今後どうすべきか、自分の言葉でまとめることができたか。

コラム　『証言記録　市民たちの戦争　ぼくたちは兵器を作った　大阪砲兵工廠』

アジア最大の兵器製造工場と言われた大阪砲兵工廠では、6万人の人々が常時働き、10代の学徒動員の工員が1万人いました。戦局が悪化する中、砲兵工廠の上空にビラがまかれ、8月14日に空襲すると予告されました。しかしそれは厳重な命令で回収され、工員たちには秘密にされました。そして終戦前日の8月14日に空襲は現実のものとなり、382人の命が失われました。学徒動員で働いていた人の生々しい証言が当時の状況を浮かび上がらせます。アメリカ本土に向けて風船爆弾を製造していた話など興味深いものです。小中高の太平洋戦争時の学徒動員の学習や、道徳の「命の尊さ」を考える題材としての活用が考えられます。